(公財)いわき市教育文化事業団シンボルマーク

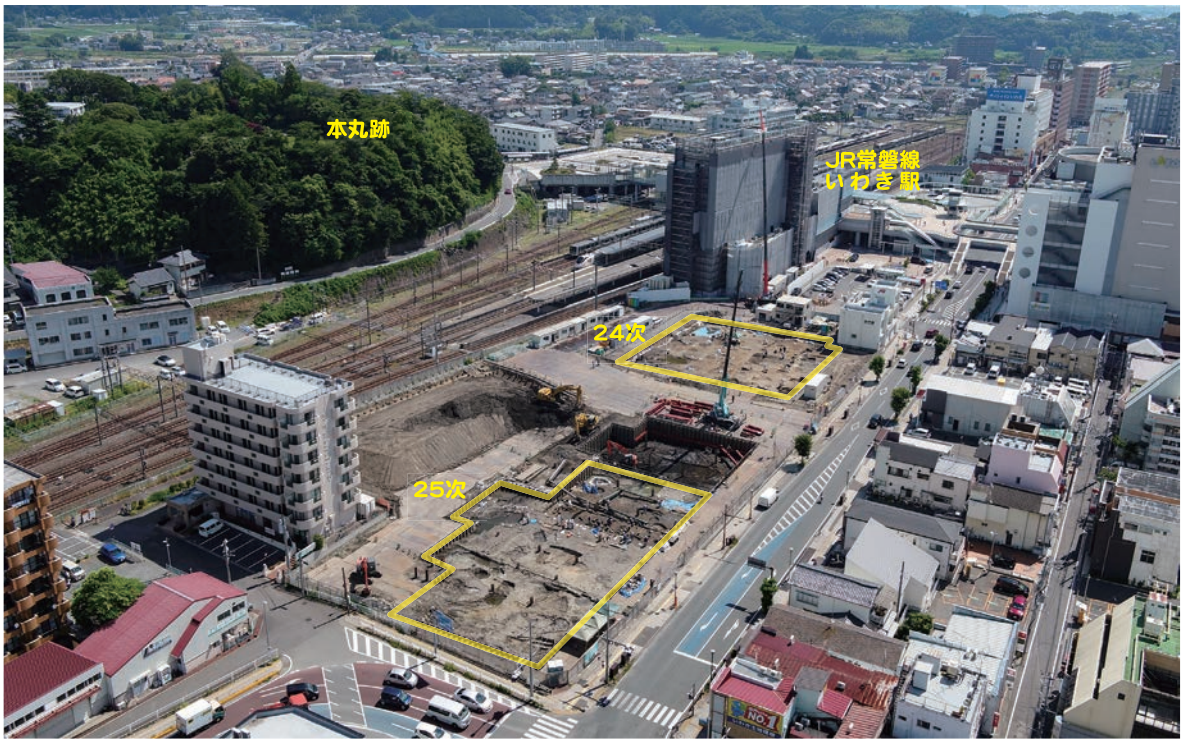
文化財ニュース いわき

第 83 号
令和 5 年 2 月 25 日
(公財)いわき市教育文化事業団
福島県いわき市常磐藤原町手這50－1
(いわき市考古資料館内)
TEL 0246（68）6775

磐城平城田町曲輪の発掘調査

平城跡24次･25次発掘調査は、令和4年(2022)5月11日から12月9日まで実施されました。今回の発掘調査は、いわき駅並木通り地区第一種市街地再開発事業に伴うもので、24次調査（商業棟区画）1,600㎡と25次調査（住居棟区画）1,382㎡を対象に実施しています。

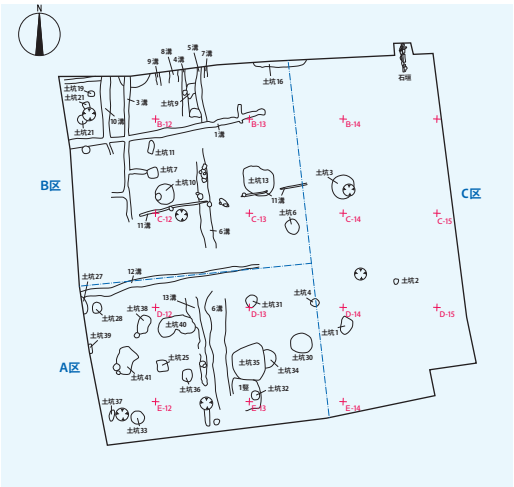
調査範囲は磐城平城の武家屋敷地である「田町曲輪」や明治期の「磐城郡役所」があったエリアで、戦国時代・江戸時代・明治時代の文化面が重層的に確認されています。下層からは、戦国時代の建物跡のほか、中国産や国内産の陶磁器類･銭貨が多数検出され、これまで不明だった岩城氏時代の様相がわかってきました。江戸時代には、地鎮跡と推定される遺構が確認されたほか、多数の建物跡や井戸・導水施設（上水道）など、屋敷に伴う遺構が検出されています。遺物は、多量の陶磁器やかわらけ、木製品（箸・板材）・金属製品（銭貨・釘）・漆器・曲物・下駄などの生活道具のほか、井戸に埋納されたと考えられる一分金が検出され、武家屋敷の区画や当時の生活を知ることのできる貴重な資料を確認することができました。



南西上空より見た平城跡24・25次調査区全景（並木通り地区市街地再開発組合提供）

とじておきましょう。

平城跡 25 次調査全体遺構図 (1/800)



平城跡 24 次調査全体遺構図 (1/800)

1．平城跡 24 次調査の概要

第 24 次調査（商業棟）で検出された遺構は、土坑（井戸跡を含む）、ピット（柱穴を含む）・溝跡・焼土跡・竪穴状遺構（たてあなじょういこう）・石垣・遺物包含層などがあります。これらの遺構が見つかった文化面は、大きく近代（明治）以降、近世・中世、古代以前の時代に分かれ、近代の面では柱穴・土坑・溝跡・石垣・遺物包含層、近世の面では掘立柱建物跡・溝跡、中世の面では掘立柱建物跡・溝跡・土坑・焼土跡・竪穴状遺構が主な遺構となります。焼土跡は固く平坦に広がっており、16 世紀代の瀬戸・美濃産の皿とかわらけが共伴することから、祭祀（さいし）的な色彩が強いと考えられます。また、中世面より下層には、耕作によるすき込み痕（こん）とみられる土層が認められることから、水田耕作が営まれていた可能性も考えられます。

2．平城跡 25 次調査の概要

25 次調査（住居棟）でも、古代から近代までの文化面が確認されています。近代の面では、石積（いしづみ）遺構・池跡・遺物廃棄（はいき）跡・柱穴などが検出され、明治時代前半の陶磁器類が出土しています。石積遺構は、塀（へい）の基礎と考えられます。近世の面では、磐城平城に伴う屋敷跡が検出され、掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡・土橋（どばし）を有する堀跡（庭園遺構）・厠（かわや）跡・柱穴などから、多量の陶磁器や木製品等が出土しています。中世の面では、掘立柱建物跡 3 棟以上で構成される屋敷跡

石垣検出状況（24 次調査 C 区）

34 号土坑完掘状況（24 次調査 A 区）

とじておきましょう。

が見つかっています。また、算盤玉に似た形の土玉39個を伴う遺構が検出され、祭祀に関わるものと考えられます。そのほかの遺構や調査区からは、かわらけのほか、肥前・瀬戸・美濃産陶器をはじめ、中国製の白磁・染付磁器や木製品などが出土しています。さらに、中世より下の層には、24次調査と同様に平安時代の土師器・須恵器とともに耕作の痕跡が確認されています。

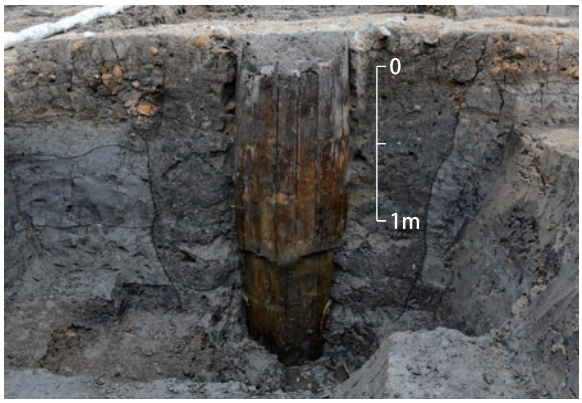
3．平城跡24・25次調査の遺物出土状況

第24・25次調査で出土した遺物は、国産陶磁器（肥前，瀬戸・美濃，相馬産など）と中国磁器（白磁・染付）などの陶磁器類が主体を占め、わずかに縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器も出土しています。そのほか、かわらけ、瓦、木製品（井戸枠・柱材・杭・板材・漆器・箸・櫛・下駄・農工具・曲物・ヘラ・羽子板・折敷・呪符木簡など）、金属製品（煙管・簪・釘・鋸・包丁・農工具など）、土製品（土鈴・土玉）、銭貨（北宋銭・南宋銭・永楽通宝・寛永通宝・正徳一分判金等）、坩堝、茶道具（ハマ）、ウマや小動物・魚骨などの動物遺体も見つかっています。遺物の出土量は、25次調査区域が全体のおおよそ8割を占めています。

4．ま　と　め

今回の平城跡24･25次調査における特筆事項として、以下の3点が上げられます。第一は、古代の耕作地を盛土整地して、中世の屋敷地としている点です。第二は、近世の屋敷地が、中世（16世紀代）の屋敷跡を埋めて整備された点です。第三は、江戸時代終末期の戊辰戦争にともなう文化面が認められなかった点です。このことは、明治の町並みを整備する段階で戊辰戦争の面を削平し、火事場整理（片付け）をおこなったことを示しています。これらの状況から、本調査区周辺では古代から近世にかけてその都度整地をおこない、居住空間として利用していたことがわかります。

これまで、いわき駅周辺では近世の磐城平城に伴う堀跡や屋敷以外の遺構は見つからないと考えられてきましたが、今回の発掘調査において近世よりも古い時期の文化面（中世～古代）が確認された意義は大きく、中世の大館城（飯野平城）から近世の磐城平城へ移り変わるまちづくりの様子が少しずつわかってきました。



井戸枠の検出状況（25次調査 C区 遺構7）

井戸に向かって延びる導水管（25次調査 C区 2溝）

とじておきましょう。

☆今回の調査で見つかった主な遺物

人形木簡　24 次調査の土坑 3 から出土した、人の形をした木の札です。薄い木の板に切り込みを入れ、丸い頭部と胴部を表現しています。禍いや穢れなどといったものをこの人形に移して井戸や溝に流し、それらを取り除こうとしたまじないに使われた道具です。

ウマの下顎骨　今回の調査では、中世面を整地した層から獣骨が見つかっています。その多くは砕けた状態で出土しており、墓に埋葬された遺体ではないと考えられます。一部には形を残したものもあり、切歯と臼歯がはっきりと確認できるウマの下顎骨も見つかっています。

正徳一分判金　井戸の埋め土から出土した金貨です。埋もれていた状況から、井戸枠を据えた際に、地鎮のために納めたと考えられます。一分金は一両の 4 分の 1 の価値を持つ通貨で、表面に年号の刻印がないことと裏面の「光次」の字体の特徴から、1714 年に鋳造された正徳一分判金と推定されます。金と銀の合金で、重さ 4.44g、金の純度は 85.7％とされています。

土　玉　算盤玉のような形状をしています。39 個がまとまって出土しており、もともとは数珠のようにつながっていたと考えられます。この付近から、銭貨（永楽通宝）やかわらけが出土しており、土玉の時期は中世であると考えられます。

折敷とかわらけ　25 次調査のＣ区から、かわらけ 6 点が木製の折敷（方形のお盆）に並べられた状態で見つかっています。近世の整地層直下で遺構が検出されており、磐城平城築城時期の地鎮の儀式で埋納されたものと考えられます。敷地の四隅に同じものを埋納する事例があることから、今回の調査範囲以外でも見つかる可能性があります。

人形木簡（24 次調査 Ｃ区 土坑３）

ウマの下顎骨（24 次調査）

正徳一分判金（25 次調査　Ｃ区遺構７）

土　玉（25 次調査 Ａ区 遺構 86）

折敷とかわらけ（25 次調査 Ｃ区 遺構 26）

とじておきましょう。